

去の統計曲線の単純な延長に華麗な未来があるといった長広告は、もはや人々を納得させない。GNPや自動車保有台数は、それだけで平安の日々を保証しはしない。ありとあらゆる文明の利器にとりかこまれながら、70年のテーマソングは欲求不満にほかならなかった。漠とした、しかし、ぬぐいがたい暗い予感がここにある。汚れた大気の中で慢性気管支炎のノドをおさえるサラリーマンも、カドミウム米を刈り取る農民も、泥の海にたのみ少ない網をうつ漁民も、なにかどこか間違っていると感じている。このままでいけば、未来は天国ではなく地獄かもしれないぬと思いはじめている。……われわれはたぶん、われわれ自身の思いあがり謙虚に反省しなければならぬのだ。故郷、自然、季節、人情といった言葉のもつ意味を、あらためてかみしめてみるのが、おそらく大切なことなのだ。われわれがいつのまにか失ってしまったものの貴重さに、もう一度気づく必要がありそうだ。われわれの所業が虚無への行進だとするならば、まず立ちどまって、おのが位置を確認することだ。立ちどまることのできるのも、また人間の英知なのである。」と。

## 未来の計算機

電気部 水島幸治

未来の計算機について、userの一人としてまた、個人としての意見を述べたいと思う。

まず、記憶装置であるが、現在の装置は計算機の本体に比べ、容積が非常に大きく、電力を多く必要とする。そこで、一つの考えとして、人間の脳を応用することである。人間の脳はあれだけの容積で、莫大な量を記憶する事ができる。応用の仕方として、計算機に脳を結合し、計算機の一システムとして使用する事と、将来を見こして、脳の記憶の機能を利用し、これを機械的にまた化学的にまた電気的に置きかえることがある。この事については、まだまだの事であるが、これを研究する事は、脳のまだわからない事を研究する事と同じであるから、医学的見地からも必要な事であると思う。話しが少し横にずれたようなので元にもどそう。

記憶装置はこのような考えがあるが、計算機本体のほうも、まだまだ高速にする必要があり、伝送ラインの方もエラーを防ぐためにも、減衰の少い、歪みの小さいラインを使用する必要がある。人間の神経はあれだけの距離をほとんど減衰も歪みもなく、信号を伝達する。記憶装置と同様に、伝送ラインにも、医学的分野である神経を電気的に解釈し、応用すれば、現用のものと比べかなり、良好な伝送が得られるのではなからうかと思われる。

ほかにも、いろいろな人間の機能を計算機に応用できる面がある。そこで、この応用こそ計算機を大きく、進展させ、計算機の応用範囲も増えてくるのではなからうかと思われる。

## 計算機とは

古 吾 古

今日では、情報化社会という掛け声と共に、計算機は、非常に日常的な「言葉」となりつつあります。新聞を開いても、計算機、もしくは、情報云々という活字を見ない日はない毎日です。そこで、一体今の社会で、一般の人達は、計算機をどの様に受け取っているかを考えてみるのも、おもしろいのではないかと思います、二、三の人に聞いてみました。

プログラムとの格闘で疲れた頭をしばし休めて読んで下さい。

「あなたは、計算機という言葉から何を、連想しますか？」

「正確」。これは、僕が最初に血祭にあげた、下宿のおばさん。長年の学生相手の生活からか彼女は、何によらず、一応の理解はしている様で、僕の問いにもそつなく、唯の一声で答えて

くれました。確かに、計算機は、その計算にしろ記憶にしろ、正確である事が重要な能力の1つであり、これが、あやふやであったなら、見向きもされないでしょう。

これとよく似た答に「マクナマラ」というのがありました。マクナマラと言うのは、ケネディ時代の何とか長官で、その発言の正確である事と、計算のずば抜けて速いところからコンピューターというあだ名を頂戴していたという説明でした。これは法文の2年生。

この二つの答えには、人間には、不可能とみなされる、記憶能力、演算速度に対する、ある種のジェラシーさえ感じられますが、案外こんな人は、その出力を鵜呑みにして、今年は雪が少ないという予報を、平気で出すのではないのでしょうか。(\*)

医学部の学生さんは、ぐっと哲学的に、「計算機は西洋人の発想であって、東洋人にはできなかっただろう」と一息入れて「わびとかさびを重んじる人間には、どだい無理さ、そうだろう。あると言えばある。ないと言えない。なんていう禅問答で満足していたんじゃないかね。」御説ごもっとも。確かに、YESかNOかという西洋の合理主義が、計算機を生み出す母体となったのでしょうか。こうした伝統を受け継いだ計算機も非常に、それを上廻る程の合理性を備えております。が、彼の挙足を取る訳ではないけれど、YES、NOでしか判定できない所が逆に欠点にも成り得るのではないのでしょうか。逆に言えば、計算機には芸術は生み出せないと言われる由縁じゃなからうか。仮に、あいまい量にも計算機が対応できるとしたら、全く旨を異にした使用法があって、非常におもしろいものとなるに違いない。それが可能となった時の人間の存在理由は？。

僕の行動範囲の広さを示すつもりで次の2つの例を挙げます。注意しておきたい事は、相手はともに、びもくしゅうれい、今は盛りのうら若き女性。

「ボタン」という答えを得たのは、コーヒーを飲んでいる時。「あまりよくは知らないけれどテレビなんかで見る計算機は、ボタンが並んでいて、それを押すだけで……。」そうです、その通りです。ボタンを押すだけです。テレビだって洗濯機だってそうでしょう。みんなボタンを押すだけでOK。そうでなかったら誰もが楽しめ、楽ができるという訳にいかないもの。計算機だって、扱うのは人間だもんね。

別の女性、非常に内気で食事以外に口を開かない、そこで素朴な疑問、一体、歯はどうしてみがくのだろう、は「……」。何も答えず、唯冷たくほほえむのみ。相手が悪かった。彼女唯今、高校受験の猛勉強中。

そろそろ乱れて来た所で、僕の無二の親友の心からの忠告を、あなたへの忠告として筆をおきます。

「計算機と心中するなよ。計算機を恋人にする事はできても、情婦にする事はできんぞ。」

——参考文献——

(\*) F・Brown HONEYMOON IN HELL 創元社

(ここで述べた事とは逆の結果となっている)

## 「総合地学」

理学部地学教室 稲吉正実

コンピューターは、計算時間を飛躍的にスピードアップした。いいかえれば、単位時間内の計算量を増大させたことである。弁証法的唯物論によれば「量的変化は、質的变化へ移行する」という。では、地球科学においては、どのような質的变化が起ったであろうか、あるいは、起りつつあるのだろうか。このことについて考えてみたいと思う。

コンピューターによる計算量の増大は、情報(データ)の処理量の増大を意味する。それには、同種の情報の処理のみでなく、異種の情報の処理も含まれる。このことは、地球科学において「地球」を総合的にみることをますます可能にしつつある。総合的にみるとは、地球のすべての